T

とばす。
のはこれの明なくして大作に取かいりしな悔ゆれどもの即すとぞ、先見の明なくして大作に取かいりしな悔ゆれども今朝はその位置を離れて半ば海に入れり。明日は何處の湊に錯一月二十五日 晴、演邊に徃き見れば、昨日寫しかけし干石船、

る事稍久しかりきの る欵 海は春の如く霞みて浪穩やかに、 上る、 二十六日 及ばす。 まこと鏡ヶ浦の稱に背かず、 乃の聲も長閑に、 白帆遠く走り、 丘には 晴、 菜の花そここしに 風なく良き日 白鷗近く群れ飛ぶ、いづこともなく耳に入 身は悠々たる自然に化して恍惚の境にあ なり、 咲きいて、林には 、淡紅なる空には富士朧の島沖の島影長く水に映 朝寫生箱肩にして北下臺に 小鳥の囀あり 脆る

り來りて賑やかなり。 社頭に三脚据えて松樹を寫す、今日は日曜なれば、里の子達集

埋め置 醜く小に、 午後主翁に招かれて茶の間に 誰の家は 又曰く「此上須賀の芋は格別結構です、八幡 いや何處の家でも腐らしまし かざしり 四 所謂水芋とよぶものにて、 俵, きなり を却 某の家は十俵、 10 て甘味を増すなど主翁の へ早く腐れのつきしならん」と、 くと頻りに追從すなり。 10 芋は知て埋めぬ方がよいのです」 茶請は蒸たる甘藷 齒に耐ゆるも お宅なとはよい方です、 いふに、 主翁日く、「土に 0) なり。 あ 形

會にゆきて語るに友なし、

聞

もよみ盡

したり、

小説にも飽きたり、

11

朝より

0)

怠りがちなりし

日記などものする折

です」と、面白き世や。て曰く、「されどこの芋は甚だ佳なり、私は他人から欺かれたのら種を取つたのだ」と、按摩こゝに至つて大に狼狽しゴマかし甘味薄くしてとても喰へません」と、主翁曰く、「此芋は八幡か甘味薄くしてとても喰へません」と、主翁曰く、「此芋は八幡か

蟹は甲を刺れて徒らに鋏を動かすのみ。に巖の間を探れるが、やがて其棒を手許へ引けば、大なる黑き海邊にいで見る、一人の男の半ば水に入りて長き棒をもち類り

なく鷄 りと答ふ、 おぼ の子守のほか、 ばの文字ある煤けたる行燈の下に、 を知らず、 船中に在り、 國人の子、 續く茅屋根は いでしてこともなく眺むれば、 を思はせ 二十七日 くなるもの、 つかなくも耳に入るのみ、 とかたる、 聲の しが、 かの國人の勇氣感ずるに耐えたりと。 昨 這度そを見んが爲めかくは二人して旅路に上 姉は九銭、 遠くきこゆると、 雨に黑みてたち上る煙りもいと力なく、 夜床に就く頃は月光鮮やかに、 人々怪みて問へば吾等は日本に生 今朝起 質に漁村の雨はその一なるべし、 野には人影もなく、何に 例によつて米國 弟は七歳なるが、 きいで見れば雨しとし 近き草屋根の下に小麥搗 山は霧にかくれて形おほろに建 いと!一詫しき日 行の話が やれ傘手にしてたてる一人 驚きてか、けたたましく 附添人もなくたぐ二人 なり、 あ けの朝の一あした 橫濱 れて父母の とふれり。 に生 名代きそ 霜 本國 3 白

かっ 5 羽鳥氏見えぬ。

11, 0) 羽鳥氏の言によれば、この地春夏の候尤もよく、 る遊なりとなり。名物の四風吹く前には、 初め迄は西風いと强くして遊ぶに佳ならず、 鷹の島迄徒歩にて渉り得べく、 溜れる水に小魚漁るも興 平砂浦鳴りてこの邊 舊の三月大沙に 秋の末より あ 春

明日よりは又風つよからん と頗る有難からぬこと、 H に迄も聞ゆるとなるが、 ふて歸りぬい も類りにその音すれば、 今

勢凄まじく家居も 島 濱邊にゆき見れば、 き上ぐる砂に顔を撲たして 風吹き出でぬ。正午頃より 浦鳴れり、 二十八日 かげに集まりて、 海のさま如何にと、 晴、 今日は果して西 昨日は平砂 動ぎいて 船は皆 高く低 吹

返す激 昨は穏やかに今は烈し、 は物凄き響と共に、雪扇の如く白浪碎け散りて頗る壯觀を極む。 浪にゆられ、 あし人の身もまた斯の如きか、 浪は天も衝かん斗りの勢にて鼕々聲をなし。 濱には海苔拾ふ童も見えず、 さらば明日又平静の天候ならんも、 平穩無事の境遇賴むに足 打よせてはまた打 岩に衝りて 知

3

n

吾は境遇に构束せらるしとなく、只目的に向ふて進めば可なり、 事 らず喜ぶにたらず、悲惨不遇の境憂ふるに足らず悲むに及ばず、 の成否は問ふ處にあらざるなり。

1: 在える風に抗して佇立するる多時、 岡の邊南をうけて暖かなる堤に、 漸く踵を返して家 圖らず一莖の蒲公英を得 路に向

(彩 水) 移して、この に怒れる太洋を見たる眼を なる野花にも嚴として奪ふ 帽をかざりぬっ 好まず、 吾はその美の輕重を問ふを たり。大なる天地には大な べからざる美を有せり、 る美あり、されどこの繊細 床し けれ 花に及ぼす、 ば 摘みて

風



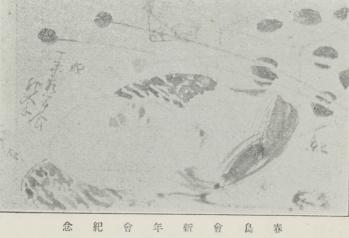
焦悴れたれど慎しみ勝にて 住へるふうちやんと呼ばる 宿の嬰兒負はんとて、近く ~小娘をり ~ 來りぬ、

は追 あはれ願くはこの娘の日毎に來たれかしと心に念じぬ。 事あり、 る事を見出しぬ、 愛らしき娘なり、 焚す 特に吾がためにもやと思ひ居しが、子守娘の く餘義なくされてかくは白き御飯にありつくなりき 常は割婆なるを、 吾は今日、この娘の不思議にも米飯と關係あ 時々夕飯に米のみか用ゐる 來れる時

破れ 暮ならずや。 風に戰ぎてさらく 廻るに、 て演邊へゆき見る、 る牛月の し障子に燈火明るく、 西の空紅に日 9 し光りをますの時は、 風つよくして寫生に出てがたし、 昨にもまさりて海荒れたり と音するのみ、 もまだ暮れきらぬに、 夕煙前なる山の裾 質に淋しきは田舎の冬の夕 たび垣に植えたる篠竹 道には人影も たこめて、 そ 夕の 食事 エリ 高くか なく 町 終

逃出 VJ 飾 と人々賞めたじへて、 出ゆきしが、 若者の一人、そは面白し早速試みばやと、 裾 綿厚きドテラを帶せずして羽むり、さて狸と立會ふや否、 引倒すため、 者と相撲ひ、 办 to 不思議と和 夜語り明すを例 夜例の通り主翁とかたる、 狸にや形同じければ見分けがたし、 れる十三佛 を持ちて肩の方に上げる、かくなさば狸は袋の鼠なるべしと 村の若者の集會場なるが、 べき透間 尙 忽ち背後に 程なく大なる狸を捕えて喜び立歸れり、よくこそ の、 話 も腕こまれき猶そこことと注意し見るに、 と音するかと思 れとて狸に勝つ者なし、 とせり、 何やら へ見れ 四方の戸締を固くし、 さて其ほとりに 其數多き標子 ば十四あり、 廻りて、襟を捉へ腰に足をかけて人 10 ある限り尋れしも更に見えず、 へば、 その 地より西方見物の先に はや其姿を失ひぬ、戸 あ なり、 和尚即ち日く、「村人きか さてこそと思 ナ 和 あ V) の寺の かたの如く支度して しき狸のありて 尚若者に教 ドテラを開き見る 彼奴早くも身を縁 僧 へど、 も來り 0 へてい 、急に其 此堂に 外に 何 堂あ 7 加

> 児文を唱ふれば、 やしといふに、 n かざるに、 よ、この十三佛は日頃 忽ち双手を突出しぬ。 佛と化け 御佛は忽ち双手を出し給 L 我の信仰厚きゆへ、 狸は、こしぞと和尚の そりやこそ彼奴ぞと、 へり、 佛の 我先 未だ其前 御前に立ちて づ試 飛 みば カコ (0)



るに、

少なからず興か

語る人の

いと眞面目な

0

作り話かしられど、

喰ひたりといふ。 速狸汁をつくりて

誰

飽迄

りて引捕

其夜は早

覺えたり

十日 分の色に苦しむ。 寫生す、日陸にな

出立す、 獄は景色よき處ときし て、寫生箱携え九時頃 + 程 にして 北條を遇ぎ 本織 晴、 の村あ 伊 豫

その名 ありの 右は平久里に左は濵に達すべし、伊豫ケ嶽をと志せしも、 こんこと 高 8 L が 7 111 瀧田 當國禪 を過ぎて犬掛 1-いたる、 寺 0) 本山 Ш 間の淋 里見家の より半里 しき村なれど八犬傳には 菩提所たる巨 道は二つに 分れ | 刹延 命寺 里

晴、

北下

臺に

n

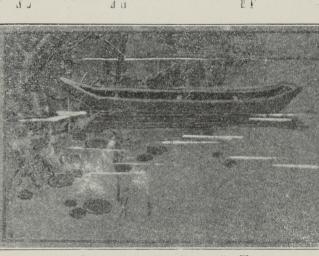
3

0 富山は道の傍にあり、 上りに苦しむ甲斐あるべくも思はれざれば登山 樹 伏姫君の 木なく水涸れて趣きなし。 八ツ房と共にありし有名な たやめつ、 左

時は二時を過ぎぬ、 なる濵の方さして進みぬ、 3 道すがら茶店を見たれど、人多く居て麥飯

三脚

に驚ろかされて半にし きしが、人の來る氣配 えへしも、 置 据えて食ふべきよき位 の包開きがたく、 てやめぬ。 えで路傍に包みをとい もなくて、こし迄携 今は空腹に



藤 下 (シッワグ) 郎 次

寫さんものをと思ひつ 風 繁昌に、港は狭けれど、 着きしは夕暮に近き頃 今戶、竹內、市部 景佳なり明日はそかり を過ぎて、 町弁揃ひてやし 加知山には 0 村

れたるな繕ひもせず、疊は隅々透きて表習れ座するも快よから かれて表二階の座敷に通るに、 空きたり。 某屋とよべる三層樓の 黑く煤けし紙はい 大なる旅店に宿 つの世に 障子は立付あしく上の方三寸 貼替 かり こし 为 かっ 知られど破

> 食事 ず、こは 8 見掛倒しよと悔めと今は詮ない

棒 V) き水 1 程過ぎて隣室の客歸り來りぬ、 逸端唄の怪しげなるを女中共の互に浮れ合ひて笑ひ興ぜり。 階下はいと賑なり、客ありとは覺えぬに三味の音喧 きか一枚敷きて、上にはこれに釣合よき揺卷 しく滯留せると覺しく女中共にも訓染あり、 はと見れば、 湯 物騒がしく、吹入る風の戸障子を動かす音、火を警むる 響など交々耳に入りて夢に入りがたし、 を流せしと覺しく、下より女中の來りて苦情をい 枕に頭いたく、 、床を烈しく踏み、枕もて火鉢の縁を 終りぬ、 薄き事寄席の布團の如く短かき事嬰兒のそれ 風呂はなしといふに早くより臥床に入 旅は憂きものと思ひぬ。 年若き男ら 山亭、 しきがは (つどろ) 何事か心に 終には つかけたり、 や此 一疊の る、 ふて争り 家に 町 憤 都 るら 0) 間 0) 臥 硬 如

畵 家 0) 長 

チ 2 ミケルアンゼロ八十九歳 ンアイバル ンブランド 1) 12 7 1) ヂ 六十三 六十 六 九十九歲 七十八歲 + 四 歲 哉 歲 ビオナルドダ チントレット FI 12 2 ヨンベリニ ラ ョル 1 スケ ズ ス 六十三 六十七 五十七 八 九 + + 一歲 歲 歳 歲 歲 歳